

複雑化する端末開発を強力サポート 携帯電話向けソフトスイート「Obigo」

今や携帯電話にはPC並みの機能が求められている。その一方、端末開発にはTime to Marketの迅速さが不可欠となってきた。このジレンマに苦慮するメーカーのR&Dを強力に支援するのが日本テレカだ。携帯端末開発のグローバルカンパニーであるテレカグループの一員として、国内での活動を本格化させている。

日本テレカが携帯電話メーカーに対する支援活動に乗り出した。

テレカグループはスウェーデンに本社を構えるグローバルITサービス企業。モバイル分野、ネットワーク装置、産業用ITソリューションなど、幅広く事業を展開しているが、特に注力しているのが携帯電話分野だ。「顧客の製品が競争力を発揮し、市場における地位とブランド力をアップするよう支援する」ことを企業理念としている。

「日本の大手端末メーカー様は、世界でも屈指の先進技術を持つにもかかわらず、残念ながら世界市場では高いシェアを得ていません。国内メーカーの持つ世界屈指の優秀な技術力を、

もっと世界の多くの人々に役立てるよう、力になればと思っています。日本法人の西弘洋代表取締役社長は、国内での活動を本格化させた理由をこう話している。

圧倒的シェアの「Obigo」

同社の主力製品は、携帯電話端末向けアプリケーションのソフトウェアスイート「Obigo(オビゴ)」だ。国内での知名度はまだ低いですが、世界では実に累積2億4000万台も端末に搭載されている。現在は約50社にライセンスを提供し、250機種以上の端末に採用されている。米クアルコム社のBREWをはじめ、世界の主要な携帯電話端末向

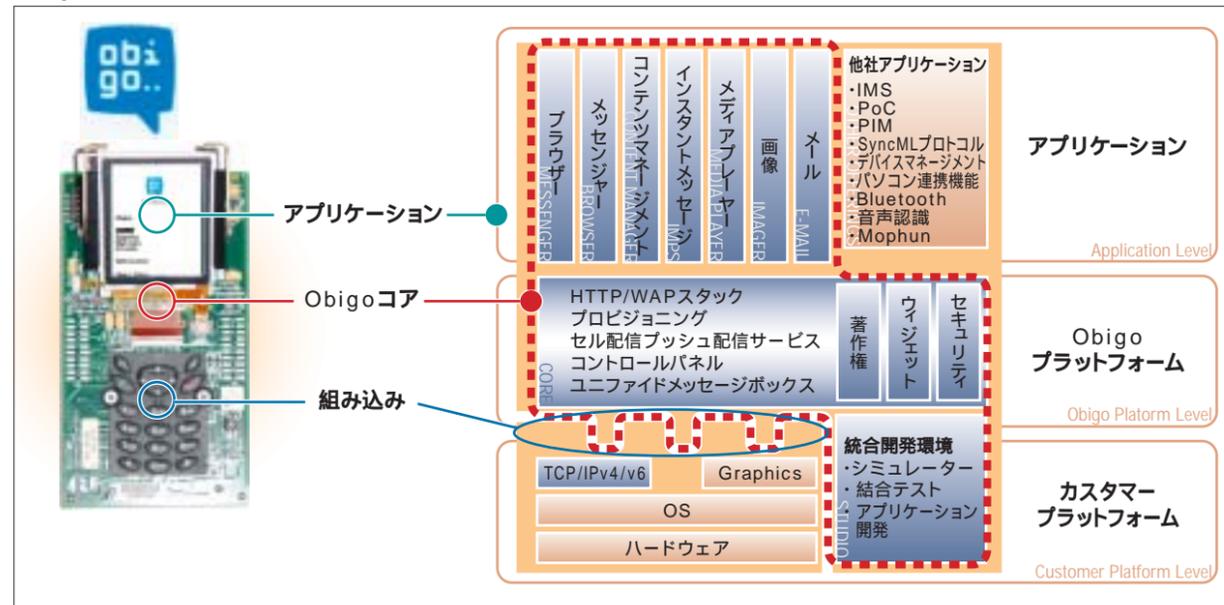
けOSやプラットフォームに使われているトップブランドである。

Obigoはもとも、スウェーデンのAUシステム社がエリクソンの依頼を受けて開発したものだ。最初から携帯電話へ組み込むことを想定して作られているため、プログラムサイズが小さく、ハードウェアの負担が少ない。小型化と低消費電力を求められる携帯端末用に最適化されているのだ。

さらに、Obigoのアプリケーションはモジュール化されているため、端末メーカーは必要に応じてこれらを選択できる。多くの携帯電話アプリケーションが相互に絡み合い複雑化しているなか、Obigoではミドルウェアが予めモジュール間の連携を保障しているため、開発期間を短縮できる。

実はテレカがAUシステムを買収した当時、Obigoは機能別の単体の製品群だった。複雑化するアプリケーション間の連携と、多様なプラットフォームへ

「Obigo」システム概要図



日本テレカ
代表取締役社長
西弘洋氏

日本テレカ
セールスマネージャ
山田貴久氏

日本テレカ
技術統括部長
小島秀登氏

日本テレカ
副技術部長
安田貴亮氏

の移植性を高めるため「フレームワーク構造」を採用。評価の高い既存の製品ラインをモジュール化して活かし、アーキテクチャを刷新した新Obigoとして、2003年秋にリリースした。もともと定評のあったブラウザ等の各アプリケーションに、根本的なアーキテクチャーの改良が加わったことで、組み込み用途への最適化が実現されたのだ。

アプリケーションの品揃えも充実している。自社はもちろん、サードパーティーと密接に連携して豊富なモジュールを用意。「端末メーカーの内製品に加え、他社のアプリもプラグイン可能」(技術統括部・小島秀登部長)とのことで、端末メーカーには幅広い選択肢が用意されている。

各キャリア仕様への準拠も万全だ。世界の主要通信事業者のサービス仕様や、携帯電話の標準化団体OMA (Open Mobile Alliance) などの動向を注視しながら開発ロードマップを展開。しかも、世界の多数の事業者と密接な関係を築き、サービスや仕様の検討段階から参画している。そこから、最新情報をいち早くキャッチして製品に反映させているため、端末メーカーはObigoを使うことで、最新の標準仕様と事業者毎の独自サービス仕様に迅速に対応できる。

常に最新トレンドに対応

テレカの個別アプリケーションの詳細をいくつか見てみよう。

最近の携帯電話のトレンドとい

えば、フルブラウザの搭載だ。同社の「Obigo Browser」はHTMLに準拠し、ECMAScriptへの対応を進めるなど、常にトレンドの最先端を走っている。また、エンドユーザーの使い勝手を視野に入れて開発に取り組んでおり、Webの画面全体を縮小してコンテンツの位置を確認できるサムネイル機能を搭載。「単にPC向けコンテンツを携帯で見るだけではなく、いかに効率良くスムーズに閲覧できるか」という点に力を入れています(安田貴亮副技術部長)と自信をのぞかせている。

複雑化・高度化するコンテンツに対しても、「Obigo Content Manager」や「Obigo Media Player」を揃える。前者はSVGを、後者は主要なオーディオ/ビデオフォーマットをサポートし、動画や音楽を滑らかに再生する。

キャリアが目指すサービスも確実にサポートする。例えば、北米で先行する「プッシュ・ツー・トーク」は、ようやくOMA標準の初版が固まった段階だが、一部のキャリアは早くも商用サービスを開始する。この先行するキャリアの動きに対してテレカは、自社の



Obigoは10月発売の東芝の携帯電話Vodafone 803Tの製品開発に使われています

「PoC(Push-to-Talk over Cellular)」技術を、多くのキャリアが導入している主要なサーバーとの間で、動作確認をすでに済ませている。

メール機能ではショートメール、写真や動画を送信するMMS、Eメールの3種類を、1つのエディターで処理できる「ユニファイドコンポーザー」の搭載も、顧客の高い期待に応えたものだ。他にもPCアプリケーションとデータを共有するための「PC Connectivity」など、多彩なモジュールを揃えている。

Obigoを使うメリットは、製品面の魅力に留まらない。「ライセンスに際しては、ソースコードをすべて公開します」(山田貴久セールスマネージャ)という点も大きな優位性だ。

一般に携帯端末の組み込みソフトはバイナリーコードの形で提供されている。このため複雑化するアプリケーション開発において、バグを完全に排除するのは難しい。ソースが開示されれば、トラブル原因の究明やバグ解析が容易になる。エンジン部分などは変更できないといった規定はあるものの、変更要求に対する自由度も高い。

さらに、製品開発の期間やコストを圧縮するため、テレカグループがObigoのインテグレーション作業を全面支援する。「お客様のニーズに合わせたインテグレーションサービスを提供しており、パートナーという気持ちで取り組んでいます」(同氏)とのこと。キャリアとの関係を重視するテレカは、どのキャリア向け製品に対しても、順応性の高さと開発期間の短縮をもたらすという。

Obigo製品の機能とテレカグループの構築技術は、日本メーカーの端末開発プロセスを最適に導いてくれることだろう。

お問い合わせ先
日本テレカ株式会社
 東京都港区新橋2-2-9 NTB・Mビル8F
 TEL: 03-3539-2700
 URL: <http://www.teleca-japan.co.jp>